AAR Japan
認定NPO法人 難民を助ける会

2024 年 4 月 30 日

パルシステム東京「平和カンパ 2023 年度」報告書

■ 事業概要

事 業 地：カンボジア王国カンダール州クサイ・カンダール郡
支援事業：高校におけるインクルーシブ教育推進事業
支援対象：ロタ高校生徒 49 人、教職員や教育行政官 20 人、ロタ高校周辺の地域住民 375 人（支援の影響を享受する在校生・教員を含めると、間接受益者は約 1500 名）

■ 事業背景

カンボジア政府は、2018 年に障がいの有無に関わらず誰もが適切な配慮を受けて学ぶインクルーシブ教育（Inclusive Education、以下 IE）に関する国家方針書を策定し、援助団体と連携して IE を推進しています。しかし、その政策は初等教育に集中しており、中・高等教育機関における IE 推進の取り組みは十分ではありません。同国の全国調査によると、障がい児の中学校と高校の修了率は、それぞれ 17.3%、1.4%と著しく低く、深刻な状況にあります。

初等教育での IE が徐々に推進されてきたとはいえ、カンボジアでは「障がいのある子は何もできない。学校に行くことも、働くこともできないのではないか」といった誤解は依然として残っており、全国的には多くの障がい児が学校にいくことなく、自宅で一日を過ごしています。AAR は、平和カンパを通じて障がい児を受け入れる側の環境を整えようと、学校環境の整備、教員、生徒、地域住民にアプローチしました。IE の推進には、学校を取り巻くさまざまなセクターにおける障がいへの理解が欠かせないためです。また、多くの学校に IE の取り組みを広げるべく、まずはモデル校を養成しようと、特定の学校で事業を実施しました。

■ 事業目標

対象地域の高校（ロタ高等学校）においてバリアのない環境を整備し、教員や生徒、地域住民の障がいに関する理解が深まることで、障がい児の就学促進体制が整備される。

■ 事業成果

- 生徒の利用頻度が高いトイレ２カ所をバリアフリー化した。
- ロタ高校の教員に、インクルーシブ教育の研修を行った結果、理解度が深まったことを確認した。研修前後に実施したテストでは、子どもの権利、カンボジアの国内法、インクルージョンなどの IE の関連用語に関するもの、視覚・聴覚・知的障がいのある子どもへの対応等、IE における多様な設問を設けた。研修後は、21 問中 17 問で正答率が上がり、平均で 14 ポイントの増加がみられた。IE 推進における要所の理解が深まったことを確認できた。

■ 活動内容

1．バリアフリー環境の整備

2．学校教員や行政職員へのインクルーシブ教育研修

3．学校生徒および地域住民を対象にした啓発活動

■ 各活動内容の報告

1． バリアフリー環境の整備

ロタ高校校舎の一部を改修し、バリアフリー仕様のトイレを２ヵ所設置しました。
また高校内にある学生ホールの入り口に、10 メートル長のスロープを設置し、車いす利用者が自由に出入りできるよう環境を整備しました。

トイレ工事前（2023 年 12 月 2 日）

トイレ工事後（2023 年 12 月 23 日）

トイレ個室内の物置として使われているスペース（写真左）を一掃し、様式トイレと手すりを設置しました。また、段差をなくし、誰もが入りやすく、介助もしやすい空間にしました。

学生ホール入り口工事前
（2023 年 11 月 15 日）

学生ホール入り口工事後
（2024 年 3 月 21 日）

さまざまな行事で生徒や地域の方々も出入りする機会のある学生ホールにスロープを設置しました。ホール敷地内には売店や食堂があり、車いす利用者の生徒が自由に利用できるようになりました。

2.　学校教員や行政職員へのインクルーシブ教育研修

2024 年 2 月 19 日～21 日の 3 日間、ロタ高校の教員ら 20 人を対象とした研修を行いました。インクルーシブ教育に関する基礎的な内容を理解するとともに、在籍している障がいのある生徒の困りごとや必要とする支援について活発な議論が行われました。

IE の講義をする AAR 現地職員（研修会場中央）
（2024 年 2 月 19 日）

3.　学校生徒および地域住民を対象にした啓発活動

2024 年 3 月 7 日、日本の高校 1 、2 年生に相当する第 10、11 学年の生徒 49 人（学級委員、副学級委員）が障がい啓発ワークショップに参加しました。障がい者のロールモデル、障がい種別、車いす利用者や視覚障がい者の介助等についてグループワークを通じて考えました。

生徒たちは、視覚を遮断した状態で校内を歩く経験をしたり、サポートの方法を考えたりしました（写真左）。議論の場では、障がいのある家族について話す生徒の姿も見られました（写真右、いずれも 2024 年 3 月 7 日）

2024 年 3 月 26 日～28 日の 3 日間、ロタ高校周辺にある 17 の村の住民に対し、「障がい」に関する啓発活動を行いました。全ての子どもに教育をうける権利があること等について、それぞれの考えを話し合ったり、障がいの定義や種別等について学んだりしました。
地域に暮らす車いす利用者や、幼少期に不発弾によって腕を失った AAR 現地職員からの意見を交えながら、多様な境遇にある方々の権利や理解を深める時間となりました。また、障がい者やその家族をはじめ、地域住民の方々が直面する困難に対して、住民と行政それぞれが主体的に協力し合い、課題解決に取り組むきっかけにもしたいという狙いのもと、地域の行政組織の方にファシリテーターを担っていただきました。

幼少期に右腕を失った AAR 現地職員が、これまでどのように育てられ、生活し、現在に至るのか、自らの経験を伝えました（2024 年 3 月 27 日）

■ 研修や啓発参加者の声

ノン・リダさん（ロタ高校教員、経済科副代表）

今回の研修内容は、初めて見聞きするようなことばかりでした。障がいのある生徒にはこれまでにも接してきましたが、あまりサポートできていなかったことに気づきました。今回学んだことを、同じ科の教員にも伝えて、生徒自身や、生徒がその時々に必要とすることに注意を向けるように心がけていきたいと思います。大切な学びを得られたことに感謝しています。

研修中のノン・リダさん（右）。どの教員も研修資料を読み込み、
真剣な眼差しで研修に参加されていました（2024 年 2 月 19 日）

マオ・メンコーンさん（ロタ高校 副校長）

今回の研修は、様々なニーズのある生徒をより適切に支援するためのよい機会になりました。今後、差別のないインクルーシブな学校づくりをしていくにあたり、研修で学んだことを、今回参加できなかった教員に伝えたり、生徒たちに実践したりしていきたいと思います。ありがとうございました。

研修開催にあたり、AAR 現地職員と事前協議をしているところ。左から 3 番目（水色のポロシャツ）がメンコーンさん（2024 年 2 月 15 日）

カット・ホンさん（地域住民、啓発参加者）

「障がいについて、そして障がい児のサポートの仕方を学ぶ良い機会になりました。今日参加できなかった地域住民にも我々が学んだことを伝え、差別のない地域をみんなで作っていきたいと思います。貴重な機会に感謝いたします」

地域の高齢者組織のリーダーを担うカット・ホンさん（右、2024 年 3 月 29 日）

■ 今後に向けて

今年度の活動を実施する中で、学校や行政から中学校での支援を求める声が聞かれました。そこで、24 年度は同様の事業を中学校 1 校で実施し、IE 推進のモデル校として育成する予定です。AAR がこれまで障がい者支援で培った経験から、IE 推進には学校だけではなくその地域にある組織との充分な連携が欠かせません。行政組織の最小単位で、地域住民により身近な郡の障がい者委員会や、教育機関との協同体制を強化し、より確実に IE を推進してまいります。